日本原子力学会「2010 年秋の大会」総合講演・報告
「原子力教育・研究」特別専門委員会報告(一般公開)「技術士制度の活用に向けて」
レジュメ

(平成 22 年 9 月 16 日(木)13:00～14:30 開催)

場所:日本原子力学会「2010 年秋の大会」(北海道大学工学部)J 会場

参加者:座長　工藤先生(九大)、技術士　18 名、一般参加者　14 名　合計 33 名

1.　報告会次第

(1)挨拶・・・・辻蔵米蔵会長(日本原子力学会)

(2)原子力分野での活用に向けて・・桶谷浩一郎氏(MHI)

(3)放射線分野での活用に向けて・・柴田徳思氏(JAEA)

(4)「技術士制度」の趣旨理解と技術士数増加に向けて・・桑江良明氏(電源開発)

2.概要

2.1 挨拶

・原子力分野の技術士制度ができ、技術士も 300 名を超えるものになってきたことから、産業界で具体的に活用していく素地が出来てきた。技術士への期待が高まるが、具体的なコアーが決まっていない。

・工認資料のチェック等への活用が一部検討開始されているが、本セッションで具体的な提案を求める。どのような制度にしていくか検証も必要。

・科学技術創造立国である我が国は、技術がしっかり根付くことが重要。技術士の活躍は大いに期待され、原子力学会としても支援していきたい。

2.2 報告及び質疑

(1)原子力分野での活用に向けて

・日本技術士会の原子力・放射線部会内に「技術士制度活用 WG」平成 21 年 1 月に立ち上げ、技術士制度の活用し技術士が許認可事項の一部を審査することの有効性を検討した成果の報告。

・検討の進め方としては、審査の原則、審査する人が保有すべき能力要件及び審査制度の検討を行い、技術士制度をそれに当てはめ、認定技術士制度概念の導入の有効性を示している。

・合わせて、他産業での認定制度である建築確認制度を参考にし、審査体制についても検討している。

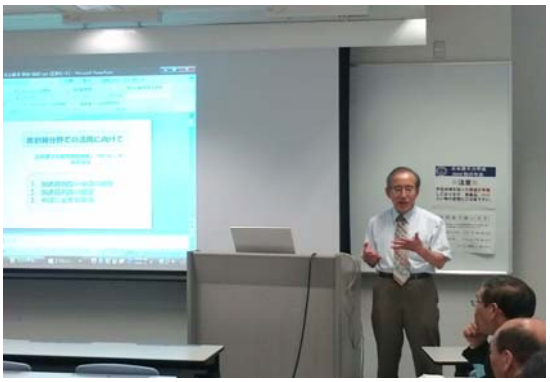
・この報告に対し、原子力・放射線部門の技術士が認定技術士になりうる要件を備えているのか、どのような仕組みで備えさせるのか、審査するための体制の品質保証の考え方等の質疑が行われた。

・座長から、原子力委員会が原子力政策大綱の改定に関する意見募集(募集期間 7/27～9/21)を行っているので、本成果に基づきコメントすべきとのサジェスチョンがあった。

(2) 放射線分野での活用に向けて

・加速器施設の放射化評価や遮蔽計算等のチェック＆レビュー分野での活用の提案。

・加速器の利用分野は医療機関で多く、今後とも加速器施設の使用許可や廃止の申請が行われる。申請には、加速器の遮蔽、放射化の評価、放射化物保管庫の遮蔽等の計算が必要で、機器設置業者または建物建設業者が行っている。しかし許認可時の計算方法等をチェックする仕組みが弱体。企業を離れた経験ある OB 技術士グループが事前チェックに参加することが期待される。



・この報告に対し、何らかの制度を確立することでなければ、やり方によっては実現できるのではないかとの意見があった。

(3) 「技術士制度」の趣旨理解と技術士数増加に向けて

・資格取得の一般的動機である「物質的期待」だけで原子力・放射線部門の技術士を位置づけてよいのか、現在の技術士制度(資格)において原子力・放射線部門の技術士制度設置経緯から本分野の技術士は社会的責任を強く自覚することが求められている。

・原子力関係組織が社会的信頼を得るための課題である「技術者倫理」、「安全文化」、「コンプライアンス」、「品質保証」、「安全・安心」に対し社会的責任を自覚する技術士だからこそ貢献が出来る。

・本分野の技術士を増やすことが、原子力技術・組織の社会的信頼回復につながる。技術士制度理解活動を推進し、現在二次試験合格者 343 名、一次試験合格者 1390 名となってきた。

・「原子力が直面する課題について、単なる言葉だけではなく本気で取り組む意思のある個人と組織は、実効性のあるものとするための一つの手段として技術士資格取得を奨励し、業界全体で活用していくべき」と締め括った。

・この報告に対し、感銘を受けたとの意見が会場からあった。

2.3 感想:今後に向けて

報告会の参加者は 33 名で、そのうち一般参加者は約 1/3 であった。開催者側主旨は、技術士制度の今後の活用の可能性を理解してもらい、技術士を目指す人を増やすこと、既技術士に、社会的責任を改めて自覚させ原子力技術・組織の社会的信頼向上に努めてもらうこと。一方参加者側は「物質的期待」から技術士取得メリットを見出すこと等であろう。内容的には両主旨で展開されていたと思うが、技術士取得を目指す人を増やすという点では、新しい人をいかに集めるか、PR の仕方やテーマ、内容への工夫等の課題が残ったように思う。言うは易しいが・・・・。

今回参加して少し気になったのは、原子力・放射線分野が新たな設置された当時、原子力技術に対する社会的信頼回復へ技術士が貢献するという大きな狙いが技術者や組織の意識から風化の道に入っていないか。これは常に関係者がリマインドしていく努力が必要なのだろう。

(大橋記)